

一卵よく世界を転覆す

1

特講が始まって以後の山岸は、もう家を捨て財産を捨てての、文字どおり今日は西、明日は東の無一物流転の革命家の生活を送っていた。会員の家を転々と泊まり歩き、買物代金、電車賃等に至るまで一切の金銭は持たず、いつも数人単位の側近とともに出歩いた。髪はぼうぼう、身にまとうはボロ服、履物はアングリ口をあけたワニ靴と、まるでゲリラ戦士さながらの生活を送っていたのである。

こうした中であつての如何にも山岸らしいエピソードを拾うと、ある人が、朝起きて顔も洗わぬ山岸を見るとがめて、

「先生、朝起きて顔ぐらい洗ったらどうですか」と促すと、当人かえって呆れた顔して相手の顔を見つめながらいった。

「戦争のさ中に顔洗いますか」

また「忙しい、忙しい、忙しうてヒゲを剃る間もないわ」というので、見ると、仕事をしているわけでもなく、室の中で日がな一日ごろごろ寝転がっている。

見かけはどうあろうと、心はまさに戦争であり、革命戦術を練るに急であつた。

それでは山岸は、革命においてどのような社会を構想していたのであろうか。

特講において人間づくりが行われ、どんなことでも行い得るといふ実践主体がつけられ、かつ方法を以てすれば如何なるものにも到達し得るといふデカルト→ヴァレリーの信念が形造られた人間にとつて、あと残されたものは、理想でしかない。社会理想さえ設定されれば、それで主体—方法—目的と三者揃つて世界の円環を閉じることになる。

しかしこの社会理想について、山岸は詳しく語っているわけではない。それは山岸ズムがまだ未完であつたということだけでなく、そのように全体的に語ることを自体を拒否していたかにみえる。彼は、山岸養鶏の基礎編が出されたのみで、続編が出ないことで、しきりに養鶏家から催促を受けたのであるが、それに対して、出さないのがいいのかもしれないと思う、と書いている。飼育が高等になればなるほど、ちょっとした微妙なことが大事になり、単なる技術など問題にならなくなるからである。

同様に彼の数十年にわたる社会理想についても、結局、ほんの「その一端」を述べるのみで世を去つていった。山岸自身のいい方を借りれば、釈迦は真実を問われて黙つて蓮の花を問者に差し出したといわれるが、自分もまた、これが理想社会だというのではなく、これが理想社会の方向であるといつた程度のものは描き出したのである。それがこれまでも度々引用し、現在も特講の研鑽資料（テキストに非ず）として使われている『ヤマギシズム社会の実態—世界革命実践の書』であつて、この書によつておよその山岸ズム社会のアウトラインを知ることができるのである。

この『実態』は山岸会が始まつた翌年、昭和二十九年十二月十五日、毎月五の日に集まつていた「五五会」において初めて公表されたもので、全体は「ヤマギシズム社会の実態」「知的革命私案」

「一卵革命を提唱す」の三篇から成っている。この三篇を同時に一年後に「会報」(第三号)として掲載刊行したのであるが、以来、この三篇をもって山岸ズムのテキスト代わりとしているのである。

その意味では、特講は主として人間づくりの機会ではあるが、従としては、山岸ズム理想社会の検討認識の場でもあるのである。

そして、その人間づくりにおいて、大きな効果を挙げたごとく、山岸ズム理想社会の検討においても大きな成果を得ている。その何よりもの証明は、現実とその理想とする社会の模型がつくられてしまったことにある。それが現在ある山岸会の試験場および実顕地であって、その母体は昭和三十四年四月、三重県伊賀町川東(通称春日)に「百万羽科学工業養鶏株式会社」として設立された。当時、大半の者が先祖伝来の田畑家屋を売り払い、家族を引き連れ、親類縁者の猛反対を押し切って馳せ参じてきたのである。つまり、内容は簡略であれ、それだけの感化力を持った社会理論として考えないと、『実態』の読みを間違ってしまうことになるということである。

その『実態』における理想社会は、余程大胆な提案でも、これまで程度の山岸ズムの基礎的理解があれば、容易に納得できる態のものばかりである。例えば、常識人が当然のことと思っている国境については、こんなものは廃止さるべきであるとしているが、その発想を辿れば無国境にある。この世の真実態として国境がないのが本当である以上、国境などというものも実はないのが本当である。国境がなければ現実はどういう利益があるかという、

「国と国との紛糾がなくなり、戦争も起こらず、国際公法や、国境を護る兵隊や、武器が不要で、兵器を造る資材や、工員や、兵隊が、平和産業に当てられます」(『実態』)

国境をなくすることが即ち、民衆の利益とじかにつながるのである。個人当たりの物資も心も、急

速にふくらみ始めるともいう。

「私は最も乏しい日本を豊かにする方法には、いろいろあると思います。富有大国と結び、国境を無くすること、世界の何処から莫大な物資や優れた思想を入れる事、日本人が移住又は出稼ぎに出るか何かの方法で、人口を稀薄にする事等、外向的な措置が成されるならば、急速に個人宛の物量資源は豊かになり、心も寛くなりましょう」(『私案』)

そして、「現在の国境は夜の囲いであり、あまりにも厳めしく、やがては唯の地名程度の昼の画線」になるだろうと予言している。

山岸は「一卵よく世界を転覆し得る」というが、この考え方を敷衍すると「己れが変われば世界が変わる」ということになる。「日本が変われば世界が変わる」でもいいのである。とにかく変わるべき主体はまずこちら側であって、相手側ではない。己れの囲をはずせば相手も自分の囲をはずす。実際、それは微妙な人間心理で、まずこちらが自我の固い殻を破ると、相手も自己を溶解してゆく。反対に、こちらが構えれば、向こうも構える。相手が固い固いと思っているのは、大抵むしろこちらが固いのである。

そんなふうにと考えると、理想社会というものも、まず打ち建てられなければならないのは自己の外ではなく内であり、すべて大事なものは、稲ならば根、鶏ならば胃、人間ならば精神と、隠されたところにあるということになる。そのことは、かの「維摩経」も説いていて、仏国品では「心淨ければ、即ち仏土淨し」という大方針が示されており、「浄土を得んと欲せば、まさにその心を淨くすべし」といっているのである。

自然には丘や穴があって汚れているのではないかという舎利弗しゃりはつに対して、螺髻梵王らけいはんはこう答えてい

る。「それはお前さんの心に高下があるから、そう見えるのだ。その我見を去って、仏の智慧によれば、この世は浄土だと見ることができよう」と。かくして国境という現実問題も、人間——終局的には自己の問題に還元されてしまうのであるが、そうした特殊な問題の論議はさておき、改めて山岸の理想社会の在り様を求めるならば、それはまさに東洋的隠者の悠々生活にほかならない。山岸はそのことを最も端的に、次のようなことばでいい現わしている。

「行ける所へ、行き度い時に行く自由、寝たい時に寝られる自由、ある人は食べ、ある人は食べられない不都合や、食べたくないのに、食べさせられる悪平等に妨げられない自由が、真の自由と云えないでしょうし、そうした自由の社会を目指しているのです。」

平等にしても、誰もが同じ大きさの家に住み、同じ衣服をまとい、同じ物を同じ量たべて、同じ作業をし、又は同一の考え方を押し付けたりするのは、悪平等で、誰でもが、どんな家にでも棲み得て、身に合う衣服を着、胃の欲求に応じて食を摂り、心身が十分に休まる丈眠って、起き度い時に起きる等の自由が、平等に得られる事が、真の平等だとします。或る人々に得られ、他の人に同じ機会が得られない仕掛けは、不平等で、今の社会機構には、こんな不平等が、甚だしく横行している模様です。

感情を抑圧されたり、職業や、居住地を制限されたりする不平等や、悪平等も一掃して、誰にも同じ条件と、均しい機会によって、各々の個性に適合した環境に生活し、その要求が充される社会こそ、正しい社会です」(『実態』(一)の⑤「悪平等を押しつけぬ社会」)

同じ意味のことは法律に關しても述べていて、「事毎に權利だ、義務だ、越権だと、困いを嚴重にし、重荷を負わす窮屈さは、自縄自縛で、自らを苦しめる人間の馬鹿さを暴露したものでしょう」

(同、③「法で縛らぬ社会」)ともいつている。氣まますを尊んで自由を称揚し、個性を生かすべく悪平等を排し、自然に従って法を否定しているのであるが、それでいて無茶にならず、他を犯すこともない。それはいわば東洋的自由人の夢想であり、ギリシャ人の賢人の在り様ではないか。

あるいは現代の若者にとって、そうした山岸の理想社会は古めかしく、退嬰的で、あるいは保守的センスにも見えようが、山岸にはそのような一見、保守的社会こそ唯一絶対の、最高の理想社会だという自信があった。なぜなら、そうした社会こそ科学的真実と符合し、社会的要望と一致し、動物実験とも合致していたからである。

科学的真実の教えるところでは、人は根源的に自由存在である。不自由は自他分離の世界に在るものであり、自他一体の対立の抗いそのものが消えたところでは、自由とならざるを得ない。西欧人は自由解放闘争を通じて自由になると考えるが、東洋人はなる以前にすでに自由であると感ずる。

人は本来的に自由であるが故に、人は生活の面では趣味三昧に生きるのが本当である。その人に最も適合した生き方である。そのことを山岸はしきりと強調して、

「皆それぞれの持ち味によって、社会的持ち場や、生き方も異なり、自分に最も適した、他に真似の出来ない生き方をする事が、一生を意義あらしめた事になります。」

先天性のもので、一応如何ともなし得ない点は別として、環境的に伸ばし得るものは、大いに伸ばし、一番必要とされる役割に就く事が本当です。

力のないものが重荷を負うことや、物覚えのよくない人が、記憶力の要る持ち場に就けば、苦勞が多くて効率が上がらず、快適とは云えないでしょう。男は男として生き、女は女に適した生き方こそ、幸福な人生です」(同、⑧「幸福一色快適社会」)

といっている。かく人生を充足して生きているものが、何で好んで争いを構えるであろう。

「各々の立場において、真実、それに自己を生かすことによって、闘争等絶対に起るものではなく、却って工場を繁栄し、自己を豊かにします」(同、①「真実の世界」)

山岸はこの世から争いをなくすために物心両面から迫るといっているが、そのことがひいては悪平等を排すとなったのである。

しかもこれらの意見が単なる理論ではなく、すでに鶏の世界で充分証明済みであったところに山岸の強みがあるので、人間も同じようにすればできる、と考えたのである。餌も水も豊富にあり、自然に生きている鶏は、鳴きわめかないし、他の尻をつつくこともない。しかもおいしい肉と卵を提供してくれる。さらば人間においても同様であろう——と。本人自身、「養鶏法そのものが、及び会そのものが、既に理想社会の縮図に組みたてられてあります」(同、「まえことば」と語っている)。

山岸ズム養鶏を典型的に象徴するものは、その止まり木にあるといわれる。鶏は止まり木にはいつも同じ箇所止まるが、それは止まり木が真っ直ぐ(平等)に見えて僅かに湾曲しており、各部が各々若干異なっているが故に、鶏は個性を以て己れの場所を択んでいることになる。止まり木に止まるといふ機会は羽数分だけ均等に与えられていて、しかも各鶏は一羽ずつみな差異があるのである。いわばここでも悪平等は排されていることになる。

各々が他を侵すことなく、自由に気ままに生活を送ることは、同時に他を扶けていることでもあるという。一部の雛は朝早くから起きていわば立ち働いているが、その間まだ睡い雛は寝ていて、いかにもなまけているように見えるが、実際は、早く起きた雛がいつ帰ってきてもいいように巢を暖めていることになる。即ち自己を自己のままに生きて、しかもそれがひとりりで相互扶助の役割を果たして

いることになるのである。

山岸ズムでは、しばり、しばられぬ人間関係」といういい方をするが、そうした極めてゆるやかで優しい個人主義において、互いを生かす「共生共活」の社会となると見ているのである。とかく自由と平等は衝突するものであるが、平等とは偶然におかずに食べられなくとも、食べる機会だけは均等に与えられている意と納得することで、不平不満と短絡的に結びつくことがない。ここでは自由と平等とはぶつかり得ないと見ている。自由、平等、扶助は、全体として一つのものなのである。

結論として理想社会をつくるための必要条件として、山岸は既述したように、

- (1) 限界を定めて、互いにその線を越えないこと。
- (2) 他を侵すことの浅ましき、愚かさに気付くこと。

- (3) あり余って保有していることの無駄を知り、物資が荷厄介になるほど広く豊満にすること。

の三条件を挙げている。その中でもことに(2)が大事であって、外面はできても内面ができていなければ、やがて理想社会は破局に至るであろうと予測している。

これを社会思想にいい換えるならば、アナキズムである。一口にアナキズムといっても、個の尊重において多様であり、バクーニン型破壊傾向のアナキズムではなくクロポトキン型建設傾向のアナキズムである。かつ日本の大杉栄の影響を受けて、アナルコ・サンジカリストの血を引いているが、もっと直接的には労働者サンジカ(互助の組合)を試みとした大杉よりも、農民の自治とサンジカを夢みた石川三四郎の説を、より自己に適応した教訓として得ているのである。

石川三四郎という、若い読者にはあまり馴染みのない名前かもしれない。しかし日本アナキズム史の中では明治の幸徳秋水、大正の大杉栄と並ぶ、昭和の代表的アナキストであり、「人間的魅力に

溢れた、世界的レベルに於ける、日本独自の思想家」(臼井吉見)である。

山岸はこの石川の考え方に明らかに学んでいる形跡がうかがえる。石川は最近その全集(青土社)が出版されて容易にその思想に触れ易くなったが、小冊集『虚無の靈光』(三一書房)のなかにも、各所において山岸との類似性が発見される。人間問題よりは社会問題の得意な山岸は、人間問題における西田天香ほどトリビアルな点にまで負っているわけではないが、それでも自分に納得できる主要な考え方をいくつも石川から得ているのである。

その意味では、ごく単純にいつて山岸ズムは、一つ原理を人間に当てはめた面では西田天香をモデルとし、社会に応用した面では石川三四郎を先生としているといっている。

そこで石川であるが、天香同様彼の全貌というよりは、山岸が換骨奪胎したものを軸にして、逆にその言説を略述してみると、彼は、アナキズムというものは、人類最高道徳をもって第一原理としなければならぬという。その根本教義として、宇宙の真実態を挙げる。即ち近代科学の宇宙観によれば、宇宙には中心というものがない。無限の空間はいずれの点を中心とすべきかわからない。強いて求めれば各自が中心であり、したがって中心は無数に多く存在することになる。

また、単に中心が無数に多いのみならず、絶対の権威または権力の主体というものがない。もちろん相対的に、あるものが他を支配することはある。しかし、それはあくまで相対的な条件においてのみであって、絶対ということはない。自然界には相互連帯生活はあるが、権力服従の生活はないのであって、強権的に他を統制することは不可能なことである。

これを人間界の政治・社会に当てはめれば、同様に、この世に強権的支配者のいてはならないのが本当である。それが存在するのは、支配者の「我」の執着から必然的に行使されているものである。

て、この各自の中心を生かさない強権支配は、地球上に行なわれる一切の罪惡の源泉なのである。

真の生活は宇宙の無中心・無辺境・無限定に即した生活でなければならない。換言すれば権威に頼らないで、幻をまったく振り捨てた生活は即ち土着の生活である。どんな小さな生命といえども、宇宙の無限の連帯の網を逃がれることはできないのであるが、そうした連帯生活が万物の間に維持されるのは万物の自治性に依るものであり、自治の徹底したものは土民生活である。

したがってアナキズムにおける革命とは政治革命に非ず、社会革命であり、各人の頭脳と心理に宇宙的人生観を植えつけ、実生活に実現するのでなければならぬ。

そのための第一の方法として、アナキズムに目覚めたものは、各々自己の周囲に非強権的共和社会を樹立すること、第二に、大衆をして自立自営し得るだけの経験と鍛練とを積ましむること、第三に、教育、啓蒙運動を徹底して行うことである。共和社会樹立のためには、労働組合、消費組合、農会や村会にも積極的に加入する。アナキズムと鍛練とは矛盾するものではない。攻撃的暴力を否定するが故にその闘いは一層冷徹なものである。教育の手始めとして、まず少年児童から着手し、新社会人を養成せねばならない。

そして、これら一般的方法論を踏まえて、なおかつ地理学的観点に基づいて重点主義をとることである。というのは、「或る地方にわれわれの努力を集中して、先づ現代社会内に可能な最大限な自由協同社会を実現し、それに依て他地区の一般人を誘導し、且つ隣接地区内に細胞の繁殖を計画するのである。それには地政学的観点に基いて独立自治の社会生活を建設するに最も便利な最も可能性の多い地方を選択することが第一要件となる」(「無政府主義の原理と其実現」)

概略、石川はこう述べている。

山岸はこの先輩アナキストに依って、宇宙的人生観による調和の恋愛論を説き、自衛隊への入隊も肯定し、大衆の依頼心を否定し、愛児に樂園を訴え、とりわけ学者を尊重し、地政学的観点に基づいて、「先づ現代社会内に可能な最大限な自由協同社会を実現」してしまつたのである。

ただし理想社会に関して、何でもかんでも石川の言を入れてゐるわけではない。そのあたりは天香の時と同様批判摂取している。石川はイギリスのカーペンターの流れを汲む美的社会主義者であつて、社会美学としてのアナキズムを称えたのであるが、そういういい方は山岸は好まなかつた。真実は真実だけでいいのであつて、美学だの、土民だのといひ換える必要はさらさらなかつたのである。クリスチャンとしての石川は仏教、老荘の思想もとり入れて、連帯自治の協同体を説いてゐるのであるが、山岸は世の「共同体」なることをひどく嫌つた。目指すは自他一体の「一体生活」であつて、「共同体」ではないというのである。その違いを例えていえば、「共同体」はにぎりめしのようなものであり、「一体生活」はもちのようなものであるという。にぎりめしは、水の中へ入れればじきにバラバラになつて崩れるが、もちは何ともない。

また、両者の力点の相違による、対照的な理論がある。石川は、マルクス主義のような歴史の外面的な動的変遷による社会観を退けて、歴史の内面に潜んでいる不変の静的原動力による社会観をとるが故に、アナキズムには「これが最後の革命だ」などという革命もなければ、「これが終局の理想社会だ」などという理想社会もないとしたのである。山岸は、それに対して、不変の原理の方に力点を置いて、一つ限りの絶対社会を目指すといつてゐる。

「併し又私も、真実の世界の謂として、便宜上それ等の言葉を用いますが、仮や、ごまかしや、空想的なものではなく、絶対変らない一つ限りのものを目指しています。」

人間社会のあり方について、一つの理想を描き、それが実現した時、又その上に、次の理想が湧いて来るならば、先のは真実の理想社会で無かつた云う事です」(同、①「真実の世界」)

これは、非常にユニークにして興味深い考え方であると思う。思う、というのは、ユニークで、興味深いことではあるが、全体として私には、もう一つ真意が計りかねるということである。しかし理解し得る限りについていえば、これは恐らく『般若心経』でいう「不生不灭」を念頭に置いての言葉と思われ、つまりは「生滅」(変化)の反対である常住(絶対)を真実とみているのである。外面の変化の内面には常住があると。

その意味では変化を保証するものは、常住ということになる。そのように解すれば、東洋的リベルタンの理想社会と、絶対変ることなき唯一の理想社会という表現の間に横たわる形容矛盾は水解すると思われる。自由ということ自体が、宇宙の恒常的真実と合致しているから、自由社会即絶対社会である。絶対社会であるが故に、二度と革命を必要としない社会である。幸福社会——不幸の対語としての幸ではなく、幸一色の幸福社会というのも、その前提を踏まえての謂である。

しかも山岸は絶対目標に対して、絶対方法を考える。一つの真実に対して、正解(もつとも早く確実な答)としての手段はやはりたった一つしかない。山頂への道は幾通りもあるという意見はとらない。これもまた抽象的(内面)には一つで、具体的(外面)には多様という意味ではないかととれる。例えていえば、絶対平和社会に至る道は、絶対知的方法しかないが、知的方法そのものにはいろいろとある。一方で山岸は、「社会機構にも水路・道路に比すべきものを設け、何れを通るも各人の自由選択に委し、決してその人の意志を妨げないのです」(『実態』)ともいつてゐるのであるから。

山岸は石川以外にも、「新しき村」を創設したトルストイアン武者小路実篤や、右翼にも関っていたのであるから、「郷村自治論」の権藤成郷らの示唆もあって、自治一体社会をつくり上げたのであろうが、それがとりもなおさず理想社会のミニチュアである以上、強権的支配者というものはいいない（発生しない）社会であるのは当然である。強権支配者がいいのみならず、社会効率的にも独特の仕組を考えた。

いつてしまえば山岸は、絶えず固有の真実を求めているのである。エンゲルスが大いにほめた労働者哲学者ディーツゲンは、『人間頭脳の本質』において、すべての真実は条件においてしか成り立たないことを述べているが、真実は恰も動植物の系統図のごとく細部から全体へと、細部を含みつつ無限に抽象化されてゆく。その局その局において真実は異なり、固有の領域における固有の真実がもつとも正常な在り方ということになる。

人間には人間の、男には男の、女には女の、「又老人・子供にはそれぞれの生き方があり、病人も亦病人としての、最適な生き方があります」（『実態』）というのも、論理的面から割り出された必然的な結論である。

二番目に、「機構と人情社会に」というが、悪平等を排するがごとく悪自由もまた排するのである。例えば鶏の場合、人間の肩に乗ったりする鶏は見た眼には愛らしいが、自由の偏りとして問題視される。また、人を束縛する法は廃されるといっても、自然生の秩序は重んじられる。有精卵をつくる場

合に雌の中に入れられる雄の配数は、微妙な具合に鶏舎毎に自然に定まってくるものである。

真の自由と自然秩序において、「機構」というものを考えなければならなくなる。人を縛る組織は不要だが、人を活かす機構は必要である。

三番目には、無駄な労苦を省くということがある。日本人はあまりにも働きすぎる。「頭を一寸一回だけ働かせておけば、いつまでもどんな省力でも出来ますのに、研究もせず、そういう仕事で額に汗して働いたからとて、神聖でも、尊い事でもないでしょう。なるべく働かないための研鑽をしましう」（同、⑦）。省力的方法によって、目標を急速に実現するのが山岸ズムの一大特徴である。

禅では「即今の今」（たった今）を大事にする。アナキズムでは間接性を排して、直接行動をと訴える。両者の趣旨からいっても、だからとした無意味な時間は不必要となる。

四番目に、これは一番目の問題と関係することであるが、優れたものも、劣ったものともに幸せになる必要がある。少数の肉体的、生活的に劣った学者は、何の憂えもなく研究に専念できることが望ましいし、頭腦的にはどんな劣った労働者といえども、最高水準の科学的成果を享受できることが望ましい。両者は両者ともに各々自分の生に忠実であって、かつ互いに扶け合うという仕組になっているのが最高ということである。

そのためには近代的製薬会社のような、研究実験施設とその成果を生かす大量生産の機構を社会的にも取り入れるのがよろしい。それは発想的には、急速実現の方法としての禅の「師資相承」とも重なることになる。

以上のような四問題から山岸は、自己の新社会を専門分業とする機構に仕立てたのである。現在の山岸会をみるに、三重県春日には「ヤマギシズム世界実顕中央試験場」というものがあり

(北海道に分場がある)、同県豊里はじめ各地に、「ヤマギシズム生活実顕地」と称するものがある。その各々の役割は、「試験場」では試験・研究を専門とし、「実顕地」はその試験結果を生かすということになっている。「試験場」は事実上「産業理」(大体、鶏・豚・牛の三種)の研究を主としているが、他に「人間理」「社会理」の領域もある。

こうした仕組によって、ことに新しくできる「実顕地」が何の試行錯誤や暗中模索を経ることもなく、最も効果的に発展してゆけることになる。そして「実顕地」が「試験場」の成果を受けて豊かに生活できる反対給付として、各「実顕地」は金銭その他、「試験場」の必要条件を負担する。「試験場」と「実顕地」は頭脳と四肢のごとく、互いに補完し合い「共生共活」の道を歩むことになる。

山岸がこういうことを考えたのは、むろん先に挙げたような前提によるが、強力な示唆として、やはり養鶏上の痛切な体験があった。養鶏などというのは、とても素人判断でできるようなしろものではない。

「養鶏は一つの産業で、仲々甘い事では事業家の技術には及ばないです。三年五年と年を開けた人や、養鶏書片手に幾年も失敗や損を重ねて、高い月謝を注ぎ込んだ人に、直ぐ高慢やになる百姓頭では、従って行けませんよ。毎日昼夜鶏に付き切りで専心打ち込んでいる專業者に、百姓や何かの片手間で肩を並べて行けるのですか」(一)の⑦「一卵革命」

肩を並べてゆけない以上、真に打ち込んだ專業者のいうことを疑うことなく、「はい」と二つ返事で聞いて実行しなさいとなる。

同じく彼が『実態』の中でも、しきりと學者を尊重しているのもその故である。

「私は明日の計画のうちの、主要項目の一つとして、一番先に挙げ度いものは、そして一番効果的

で、この乏しい日本を豊かにするものは、知恵の鉦脈を探り当て、それを開発することだと思いません。幸福条件を解明し、それを探究して突き止める適任者を見出し、その人の活動を阻害する凡ての条件を排除し、又保護して、経済的に、精神的に援助・協力する、頭脳チャンピオンに期待する方法を、絶対的に強化したいと思います」(同(二)の①「源泉の涵養」)

そのための実践ということで、一時期、理論物理学の湯川秀樹博士の家庭に新鮮な卵を送りつづけていたことがある。しかし、この専門分業という考え方は、主としてクロボトキンの理論からして、アナキストの間では不適当なものとされているのである。なぜなら、資本主義の悪とは、まさに分業にあるので、分業によって人間はバラバラにされてしまった。それをとり戻すべく分業を廃して、仕事の上でも総合であらねばならないとするのが彼の意見である。この意見を根拠としてアナキストは大概分業を否定している。

しかし、それにまた異論を称えて分業の利点を強調したのが、石川三四郎である。石川は『無政府主義研究』(九章)のうちでも、わざわざ一章をさいて社会的分業を論じて肯定している。彼によると資本主義の下における賃金奴隷としての分業は否定するが、自然発生的なる地方的分業および技術的分業は避けられないし、フリーエの説いたような分業の「交迭法」を実施して仕事を変えてゆけば、分業は決して不経済、不衛生、不条理なものではなく、反自然的なものでもないといっているのである。

ことに人間には個性というものがある。各人が自己の個性に基づいて職業の選択をすることは、自由社会における最も著しい現象である。各人その顔の異なるが如く、その職業の選択にも実行にも自ずから差異が生ずる。こうした分業は決して人間性の没却とならないのみならず、むしろその開発と

拡充の結果をもたらすものであるとしている。また、O・コントを引いて、「動物学の研究によれば、動物身体の優越性は各種機関が益々分化して、而も連帯するに従って各種の職能が益々専門的になるという点にある」とも書いている。

山岸はこの石川の社会分業論を聞いて、いよいよ自分の専門分業の機構に自信を持ったという次第である。(その以前、専門分業家としての画学生の息子のために、山岸は絵具代を借金して歩いたのも同じ趣旨に依るものであろう)

3

来るべき新社会について、山岸は機構と同時に人情を重視している。『実態』には「④機構と人情社会」とあるし、「私案」には「④人情社会組織に改造」とある。要は理想社会の基礎は「闘争」ではなく「愛情」であるというものであるが、これを説明して、

「理想社会には、『親愛の情が絶対条件』であることは、会の趣旨として強調している如くです。即ち権利や、義務や、機構・制度や、身体健康・物の豊満のみでは、解決出来ないものがあります。

しかも幸福条件には、心の豊かさが主要部分を占め、幸福なる人生を理想とする社会構成は、人間愛の基調の上に組み建てねばならないのです」(『実態』(一)の④)

「人は、人と人によって生れ、人と人との繋がりによらねば、自己を次第に継ぎ、永遠に生きることは絶対不可能で、その関連を知るならば、自己一人限りとの考えは間違ひなる事が解り、お互いの間に愛情の含まれるこそ、真理に相違なく……この条件を必ず重大要素として組織し、総親和社会へ

の精神革命を必要とする所以です」(同、⑭)

といている。いくら優れた機構があつて、物資が豊かであろうと、人情にんじやうがなければ「無味乾燥、器物の世界に等しく、潤いのない造花の社会です」(同、⑭)ともいっている。

山岸ズムではどんなことがあつても、終局は精神↓心に還つてゆく具合になっている。そうでないと、山岸ズム社会そのものの存在が危ぶまれることをも見通している。もし人情がなければ山岸ズム理想社会が除々に、あるいは急速に崩壊する危険性がある。その予感よかんは多分、仏教の見地からくるものであろうが、歴史・社会学的にみても正しいのである。

仏教では完結性を現わすに、「大智大悲大方便」といふいい方をするのであるが、大智は、二元的にものを分けてみない根本の知恵であり、大悲は、その智から現われ出る無差別平等の慈悲である。これが禅にあつては智は尊ばれるが、比較的悲はうとんぜられる。しかし、真実は「初めに慈悲ありき」で、悲があつてそこから、智も方便(方法)も生れる。愛情は哲理と一致するが、哲理の前にまず愛情がなければ哲理自体わかりようがない。

慈悲とはどういうものかというところ、キリスト教のような上から下への神の恩寵といったものではなく、常に同じ高さの同苦の思いやりといったものである(梵語の原意は最高の友情とでもいふべきもの)。同苦の思いやりは、それを改めたいという願望と重なる悲願となるが、山岸は、この世から争いをなくしたい、無駄な労苦をなくしたい、不幸な差別者や醜女をいなくしたい、ひいては子々孫々に樂園を与えたいの大悲願において、自己の理想社会を組み上げたのである。

また、歴史・社会学的にもというのは、現実テストされた共産体史を眺めての話であり、ロバート・リーフマン『共産部落の研究』(大宅壮一訳)によると、「概括的に言うならば」共産団体として

成功を収めたものは、宗教思想がその団体の成立する根本原因となったものであり、社会主義実験としてなされたものは常に失敗に終わったといっている。宗教性↓精神性↓人情の欠けた共産体は強権によらねば、必ず崩壊するのである。リーフマンはその実証性として主に北米における実験（キリスト教系「アマナ共産体」、フーテル友愛団、社会主義系「オーエンの「ニュー・ハーモニー」、フリーエの「ファランジュ」等）をもって論じているのであるが、日本でも代表的な共産体とされる協同体は非宗教を唱えつつも、宗教的系譜にある。（一燈園―大乘仏教、心境部落―天理教、大和紫陽花邑―神道）

石川は教育・啓蒙の眼目は、「自他人格の尊重」にあり、さらに進んで「無明との戦い」にあるとしているが、仮に宗教は否定しても、宗教が対象とした人間問題は残るのであるから、絶えず人間から発し還るようであれば、達成された理想社会は空中楼阁となってしまう。その故に石川のアナキズムは運動家というよりは、人々の觀念切り換えの啓蒙家の発想に本領を置いていたのである。山岸また同じであった。翻っていうならば、結局理想社会をつくり上げるものは人である。「大智大悲大方便」を持った人である。山岸はその点において、石川とはまったく関係なしに、痛切にそのことを感じていた。人がいなければ仕事にならない。人がいてはじめて己れの理想社会が急速に成り立つ。「人はおらんか、人はおらんか」と、恰も古代ギリシャ哲人のように山岸は、昼提灯をかけて人ごみの中を探して歩いていった。

このことはあるいは彼の、「法に依って人に依らず」の考え方と矛盾するように聞こえるかもしれない。技術は誰かれなしに万人に使えてこそ、技術である。技術の優秀さと使う人の人格とは関係ない。求められるべきはより高い技術ということになるのであるが、しかし、その優れた技術を産み出すものはやはり人間である。ここにより優れた人が求められねばならない根拠がある。仏教ではその

ことを、「法に依って人に依らず」という一方で、「法は人に依って貴し」といういい方をするのである。釈迦と法とは別々なものであっても、釈迦は法を体得されたことによって仏となられたのであるから、「法は人に依って貴し」となる。

早い話がどんなに優れた機構が考えられたところで、そこに人材がなければ機構は働きようがない。試験場と実顕地を専門分業化してみたところで、肝心の試験場に人がいなければ、新理論、新技術を実顕地へ送りようがない。また「私意尊重公意行」といつてみても、最終的に公意行と判断するのは人でしかない。より複雑で微妙な問題は、より優れた賢人でなければ解きようがない。（五十三年四月、春日山は試験場を一時的に廃して、実顕地となっている）

山岸が農業養鶏編の前編のみ出して後編を出さない理由として、「育雛四〇日迄は実に易しく、誰の目にもその良さが解りますが、その以後になると、追々と技術的に複雑さを加え、損益の岐路は実に微細な処にあり」（「一卵革命」）といっているのであるが、社会についても同じことである。最終的な人間幸福社会の損益の岐路は実に微細なところにある。その微細さを感じることができる能力のある人をこそ、求めているのである。

凡人には只一色としか見えない黒も数十色あるそうであるが、その数十色の黒を見分けることのできるのは超人的人間である。そのようなすべてを見通した超能力（宇宙生命と完全に一体になった時はじめて生れるとされる）を持った人間が、日本に一人出てくれば、「一粒万倍」やがて人類社会に二度と革命を要することなき、完全理想社会が出来上がるかと山岸は予測した。それは決して夢でもなければ、ホラでもない。科学的・数理的・心理的にも正しい、本質的基盤の上に立つ判断である。その一卵の人を求めて、山岸は昼提灯をかかっていたのである。